

大学卒業後、2004年に「地域の力によって病児保育問題を解決し、育児と仕事を両立するのが当然の社会をつくれぬか」と考え、フローレンスを設立させた駒崎氏。この10年あまりで着実に成長してきたフローレンスは、2013年度日本経済新聞「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」の大賞を受賞。駒崎氏に、フローレンスの成長の秘訣と今後の展望などをお伺いした。

あの人に聞く

special Interview

フローレンス 代表理事

駒崎 弘樹



日本経済新聞「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」の大賞を受賞、おめでとございます。受賞されたご感想をお聞かせください。

本当に嬉しかったです。ありがたいことに今まで様々な賞を受賞してきましたが、今回のこの賞の授賞式で、利用者の方とお子さんが出てきてくださって、そのお子さんから、「僕も将来社会のためにな

る仕事をしたかった」というお手紙を読んで下さいました。その時は、もう感情を抑えることができませんでした。このために今まで頑張ってきたのだと、そう心から思いました。

これまでご活動を続けてこられて、ターニングポイントがあればお聞かせください。

ターニングポイントといえる飛躍の一步はありませんで

した。実は、「千本ノック」をしているうちにここまでできたという感覚です。私は、フローレンスを設立させた頃、保育事業をすることも、個人の方を対象にしたビジネスをすることも初めてで、設立当初は課題だらけでした。正直、辛かったです。ただ、目の前にある課題を一つずつ乗り越えてきたら、今につながったという感じです。

駒崎さんには現場を持っていく強みを生かし、政策提言なども積極的に発信されておられますね。

実は、初めてある自治体の市民委員会に入った時に、市民課みたいところが「子育ての楽しみを教える」ためにキャラクターショーを実施し

あの人に聞く

special Interview

ていました。なぜ自治体に子育ての楽しみを教えてもらわないといけないのか、しかもキャラクターショーで、違和感を感じ、その感じた違和感を伝えました。すると他の担当課の方に会が終わった後にこっそり「よく言ってくれましたね」と言ってもらえたのです。翌年その事業はなくなりました。それまでは政策などは変えられるものではないと思っていたのですが、自分

の発言が発端で、自治体の政策などが変わっていくその成功体験の積み重ねがあり、今は積極的に政策提言などしています。日本では、現場の人、仕組みの人との隔たりが少しありますが、現場をもち全体像を把握して発言することで、耳を傾けてもらえます。私は事業をもつて社会を変えるというスタンス、事業をもつて仕組みを変えるというスタンス、両方を身につけて、制度にアプローチしていきたくと思っています。両利きの人が増えれば、もつと社会を変える速度は早められるはずです。



なんです。普通に大学を卒業して、普通に就職して、普通に結婚して、普通に子どもを産んだ。そしたら配偶者からDVを受けるようになった。そして離婚し、子どもを育てながら仕事をすることが難しくなり、収入が不安定になったというお話をお伺いしました。私も何も変わらない環境だったにも関わらず、突然そうなってしまったわけなのです。肌感覚でそれはおかしいと感じました。どうにか解決できないかと思っていた頃、韓国で開催された「社会起業家シンポジウム」に出席したところ、韓国では休眠口座の活用を進め、それを原資にマイクロファイナンスを行って貧困問題を解決しようとしてい

るとい話を聞きました。日本でも実現させたいと思いました。そして「休眠口座国民会議」を開催し、様々な方とプロジェクトを進めることで、個人ではできない、国の政策を動かす経験をしています。ぜひNPO業界一丸とって実現させたいです。

一緒にこの「休眠口座」プロジェクトを遂行していて、駒崎さんの柔軟性や、絶対実現するぞという妥協しない姿が印象的です。

使い道などでもマイクロファイナンスだけではなく、困っている人にお金

フローレンスは事業モデルが構築されている印象が強いですが、同時に寄付も集めていらっやいます。駒崎さんの著書「社会を変えるお金の使い方」で寄付について記されているので、駒崎さんが寄付に関心をよせられた経緯を教えてくださいいただけますか。

フローレンスは病児保育を提供していますが、実は本当に届けたい受益者である「ひとり親」に届いていないという自己矛盾を知り、愕然としました。いいことをしていると思っていました。自己満足だったんだと。それを何とか打破するために「サポート隊員」という寄付制度を導入しました。寄付のマーケティングは事業をする上でのマーケティングよりも難しいですね。試行錯誤しています。ただ、寄付に託された思いなどを感じると、血が通っている感を実感しています。また、寄付を通じて社会に参画しているという意識を持ったなどのメッセージをもらうと、この「あたたかみ」がいいなあともっと広げていきたいと思うようになります。本に記しましたが、寄付の歴史についても調べましたが、実は日本に



は昔から寄付は根付いているんだ、という意外なことにも気づきました。ファンドレイジングジャーナル読者の皆さんにも、「社会を変えるお金の使い方」読んでもらいたいですね。

自民党の政策にも入った「休眠口座」ですが、そもそも「休眠口座」の活用を実現させようと思った経緯を教えてくださいいただけますか。

「ひとり親」支援を開始して、日本における「貧困」という課題に直面しました。進学したら奨学金などの制度を活用できませんが、塾の費用や受験費用が捻出できないため、望む学校に進学させられないなどの問題に初めて触れました。しかもその「ひとり親」が普通の方

が届けばいいと思って柔軟に考えていますが、この休眠口座の活用を実現するというだけでは歴史的にも重要だと思っと思っています。どのようなアプローチであれば実現させたいとその一心です。明白にたくさんの方が助かるわけですし、完全にできないわけではないと気づいてしまった以上、やらないといけないという「思い込み」で邁進しています。

また、休眠口座の活用が実現したら、こういう方に届くという個人の顔が浮かんでくるんです。そうすると「間違っていない」と思えるわけです。擦り切れるまでやろうと思っっています。

最後に、駒崎さんのようになりたいと社会起業家として奮闘しておられる方や、これからソーシャルビジネスをしたいとお考えの方にメッセージをお願いします。

ソーシャルビジネスは、本当に人の助けになれて楽しいよ！時々つらいけど、でも楽しい。「楽しい」って感染するし、その「感染」を生んでいくのも楽しい！やるなら、今でしょ！

ありがとうございます。
(聞き手：日本ファンディング協会 鶴尾雅隆)



Profile 駒崎 弘樹 (こまざきひろき)
1979年東京都江東区生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業後「地域の力によって病児保育問題を解決し、育児と仕事を両立するのが当然の社会をつくれまいか」と考え、フローレンスをスタート。2005年から日本初の非施設・共済型「病児保育」を開始。2008年にNewsweek「世界を変える100人の社会起業家」に選出。2010年から待機児童問題解決のため「おうち保育園」を開始。震災後は被災地支援に携わる。2013年度日経ソーシャルビジネスイニシアチブ大賞受賞。

Profile 認定NPO法人フローレンス
こどもの熱や軽い病気の時に、安心して預けられる場所が圧倒的に少ないという「病児保育問題」を解決する。子育てと仕事、そして自己実現のすべてに、誰もが挑戦できるしなやかなで躍動的な社会を実現するというビジョンを掲げ、活動している。